



No. **5**

2017

CONTENTS

| | |
|--|----|
| サラダ・ボウルからメルティング・ポットへ | 1 |
| 協賛企業 | 1 |
| 競争的外部資金の獲得支援事業 | 2 |
| 科研費採択課題を紹介しします | 2 |
| 平成29年度あらたに人間生活文化研究所の特別研究員となった方々 | 2 |
| 日本学術振興会 科学研究費助成事業 平成29年度採択課題 | 6 |
| 国際学術研究・協力・交流事業 | 7 |
| オンラインジャーナル「人間生活文化研究: International Journal of Human Culture Studies」 | 13 |
| 大妻女子大学 戦略的個人研究費 | 14 |
| 人間生活文化研究所 研究費助成事業 | 15 |
| お知らせ | 16 |
| 人間生活文化研究所 研究費助成事業関連 カレンダー 2017 | 16 |

〈大妻女子大学人間生活文化研究所〉

サラダ・ボウルからメルティング・ポットへ

大妻女子大学の人間生活文化研究所ウェブ・ページをみると、「所長からのメッセージ」を読むことができる。メッセージは、簡潔に研究所の現在の役割を紹介しており、2008年を境に、研究所が、それまでの自然科学中心から、「生活の学」全域にスコープを広げたこと、また、研究所の事業も、研究それ自体の推進から、それを継続しつつ様々な研究サポート活動へと展開を遂げたことがわかる。そこで、研究所が出しているオンラインジャーナル『人間生活文化研究』No.26(2016年)にアクセスしてみた。658頁という大部のもので、原著論文12、報告37、資料10が掲載されている。原著論文も報告も資料も、すべて、人文科学、社会科学、自然科学の領域に広がってお

り、メッセージ通り、「生活の学」全般に、研究対象が拡大している。また、投稿原稿も、本学の教員のみならず、かなりの数の学外研究者が執筆しており、本学における研究の社会的広がりを認識させるものとなっている。

大学教員は、各人がそれぞれ専門の領域を持っている。そして、専門の領域には、それぞれ学会という組織があり、各人の専門研究は、その学会で発表され、論文として掲載されて認知を受ける。将棋や囲碁の世界ほどの「唯格社会」ではないといえ、研究者は、ここを主戦場として、日々、厳しい競争に直面する。研究は、それ自体の内在的論理に基づいて自己展開していく側面、いいかえればニーズではなくシーズに基づいて展開していく

側面があり、ある意味では、閉鎖的構造を持っている。これは研究にとって必然的なものであるが、これだけではパラダイム・チェンジはなかなか起きない。その場合に必要となるのは、異物の混入である。研究所は、実に多様な研究領域を包摂している。さしあたりは、サラダ・ボウルかもしれないが、これがメルティング・ポットになれば、新しい化学変化が期待できる。研究所が、そうした機能を果たしてくれることを期待したい。



大妻学院 理事長
大妻女子大学 学長
伊藤 正直

協 賛 企 業

人間生活文化研究所の事業は、多くの企業の皆様からご支援いただいています。

前田建設工業株式会社
鹿島建設株式会社
清水建設株式会社
ダイダグ株式会社
株式会社三井住友銀行
株式会社九電工

山崎製パン株式会社
株式会社オンワードホールディングス
三菱地所株式会社
株式会社岡村製作所
富士ゼロックス株式会社
株式会社三越伊勢丹プロパティ・デザイン

キユーピー株式会社
東京ケータリング株式会社
株式会社内田洋行
SMBC日興証券株式会社
株式会社中村屋

(順不同、2017年6月30日現在)

競争的外部資金の獲得支援事業

■ 科研費申請講座「科研塾」

人間生活文化研究所では、大妻女子大学教職員、研究所研究員、大学院生を対象に総務センター・総務グループ、総務・財務センターと協働で科学研究費助成事業申請講座「科研塾」を開催しています。

| 開催日程など | | | |
|---------------------|-----------------------|-------------------------------|---|
| 7月28日 (金) | 17時30分 ～ 19時00分 | 千代田キャンパス (本館E棟11階) 会議室2 | 第2回 テーマ:平成30年度科研費申請に向けて-科研費申請をきっかけにした研究活動のPDCA- |
| 10月3日(火) 又は4日(水) | 16時30分 ～18時 | 多摩キャンパス (3号館 3329教室) | 第3回 テーマ:科学研究費を獲得する申請書の書き方と重要ポイント |

講師は大澤清二副学長・人間生活文化研究所所長ほか予定。



4月1日に開催された科研塾では、新任教職員を対象として「研究活動スタート支援」の計画調書について、戦略的な作成方法が伝えられました。参加者は11名。

受講を希望される方は事前にお申込みください。

お申込み先 03-5275-6047(千代田キャンパス内線5650) info@o-ihcs.com

日本学術振興会科研費HP >> <http://www.jsps.go.jp/>

平成30年度公募からは新たな応募書類(研究計画調書)を使用することになります。詳しくは、9月頃、上記HPで公開される公募要領を確認してください。



当研究所では、申請内容に関する相談や、専門家による申請書類の添削を随時受け付けています!!上記「お申込み先」にご連絡下さい。

科研費採択課題を紹介します

科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金/科学研究費補助金)は、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」(研究者の自由な発想に基づく研究)を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」であり、ピア・レビューによる審査を経て、独創的・先駆的な研究に対する助成を行うものです。(日本学術振興会ホームページより)

平成29年度、本学では、**新規採択課題13件を含む、全48件が採択されました!!**

新規で採択された方は以下のとおりです。おめでとうございます!

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 基盤研究(B) 水谷 千代美 教授(家政学部) | 基盤研究(C) 石川 照子 教授(比較文化学部) |
| 基盤研究(C) 松村 茂樹 教授(文学部) | 高田 馨里 准教授(比較文化学部) |
| 榎本 恵子 講師(文学部) | 伊藤 みちる 講師(国際センター) |
| 松本 暢子 教授(社会情報学部) | 高木 元 教授(文学部) |
| 大出 春江 教授(人間関係学部) | 小林 実夏 准教授(家政学部) |
| 福島 哲夫 教授(人間関係学部) | 若手研究(B) 古川 敏明 准教授(文学部) |

研究成果公開促進費(学術図書) 下田 敦子 講師(人間生活文化研究所)

※課題名等については、本誌6ページ、7ページをご覧ください。

3ページより新規採択課題のうち6件と、8ページより継続課題等10件の研究内容や成果についてご紹介します。

平成29年度あらたに人間生活文化研究所の特別研究員となった方々



大妻学院 顧問
前大妻学院 理事長
前大妻女子大学 学長
花村 邦昭



大妻女子大学 名誉教授
河野 武



大妻女子大学 名誉教授
東明 佐久良

<新規>研究課題

近代ボストン美術館における日中米文化交流

研究代表者 松村 茂樹

所属 文学部

種目 基盤研究(C)

研究期間 H29-H31



本研究は、近代における米国のボストン美術館を舞台とする日・中・米文化交流の重要な意義を明らかにすることを目的としている。

ボストン美術館東洋美術展示室には、「中国最後の文人」と称される呉昌碩(1844-1927)の手になる「与古為徒」扁額が掛けられている。これは、当時上海在住の漢学者・長尾雨山(1864-1942)が、隣人の呉昌碩に揮毫を囑し、ボストン美術館中国・日本美術部長であった岡倉天心(1863-1913)に贈ったものである。岡倉がボストン美術館のために行った中国美術収蔵活動は

高く評価されているが、その根底には長尾や呉昌碩による直接間接の助力があり、岡倉の活動が中国の文人的教養に基づいた高度なものであったことを提示したい。

筆者は、これまで四半世紀以上にわたって、呉昌碩の研究を行っており、博士学位論文をまとめた『呉昌碩研究』(2009 研文出版)刊行後も、呉昌碩とその交流、とりわけ日本人士との関係を中心に研究を重ねて来た。そして、2015年4月より1年間、ボストン大学客員研究員としてボストンに滞在し、ボストン美術館で岡倉及び長尾の中国関連事業

に関する資料調査をする機会に恵まれた。その過程で、上記のことを裏付け得る資料及び岡倉旧蔵漢籍等を発見することができ、さらには、岡倉が購入した中国美術品をリストアップし、「ボストン美術館所蔵岡倉購入中国美術品目録」を作成した。本研究期間に、これらの分析を進めるなどして、上記研究目的を達成したい。

なお、科研費申請にあたっては、大澤清二先生のご教示と人間生活文化研究所及び総務グループのご助力をいただいた。記して感謝申し上げます。

<新規>研究課題

17・18世紀フランスにおける文献資料に見るモリエールと古典ラテン喜劇作家の受容

研究代表者 榎本 恵子

所属 文学部

種目 基盤研究(C)

研究期間 H29-H31



「ヨーロッパ喜劇の父」であり「ラテン語の日常会話の師」と称される古典ラテン喜劇作家プラウトゥスとテレンティウスは17世紀フランスに多大な影響を与えていますが、その呼称のイメージと作品の評価には乖離があります。これまでの研究では時代を跨いで1541年から1691年を対象に「教育機関」、「翻訳論」、「演劇論と劇作法」の三視点からこの二人の古典喜劇作家の評価とそのイメージを検証してきました。

本研究では、第四の視点を加え、さらに時代を広げることで、世紀ごとに区切られる時代の枠を超えた

俯瞰的視野の中で、ジャンルを越境した複眼的考察をしていきます。第四の視点とは、書簡及び定期刊行物などの文献資料の検証で、フランスの喜劇に多大なる影響を与えた古典ラテン喜劇作家と、その後継者であるモリエールの評価を再確認し、現在まで続く彼らの受容を浮き彫りにしていきたいと考えています。

これらの資料収集・分析は、彼らの受容を更に広い視野での俯瞰的考察を可能にしますが、同時に前研究で明らかになった点を含めたフランスの演劇および文学全般の

より豊かな汎用性のある基礎資料としての機能を持つこととなります。

フランスの喜劇の礎となった「喜劇の父」プラウトゥスとテレンティウスの精神は、17世紀、モリエールによって引き継がれ「フランス喜劇の父」として現在まで続いています。本研究では、更に時代を進めてそのモリエールの評価が後世-18世紀-にどのように続いていったのか、また古典ラテン喜劇作家はその後どのように評価されていったのかその受容の変遷を浮き彫りにしていきたいと考えています。

<新規>研究課題

第二次世界大戦期、空爆標的地図にみる米英連合国の空爆戦略の転換

研究代表者 高田 馨里

所属 比較文化学部

種目 基盤研究(C)

研究期間 H29~H31



本研究は、第二次世界大戦期において「精密爆撃(precision bombing)」を標榜していたアメリカ軍が、いつ、いかなる状況で、「絨毯爆撃(carpet bombing)」へと戦術を転換させたのか、その転換の契機を明らかにすることを目的としている。この研究課題に先立って、「第二次世界大戦期、米英両国の世界地理認識の比較研究—地図史学的方法論を用いて—(基盤研究(C)26370870)」を平成26年度から平成28年度にかけて行った。その際、ヨーロッパ戦線に派遣された

アメリカ軍は、イギリス軍が行っていた対独夜間無差別爆撃に対し、「白昼精密爆撃」を行うため、全く新しい空爆標的地図を開発し、それを米英連合国による共同地図作成によって実用化したことを明らかにした。その「斜角遠近法標的地図」は、標的への多角的な侵入航路を描いた、フライト・シミュレーターのような地図であった。これは、おもにヨーロッパ戦線でのみ用いられた地図であり、アメリカ軍の「精密爆撃」戦略のために作成されたものだった。本研究は、この地図作成過

程を明らかにした先行の研究課題を発展させ、戦時中に作成された空爆標的地図の作図法とその目的の変容を分析することによって、ヨーロッパ戦線における空爆戦略の変容、さらには、ヨーロッパ戦線から太平洋戦線への転戦後の空爆戦略の転換を検証する。すなわちアメリカ軍の「精密爆撃」戦略から「殲滅作戦」への転換である、広島・長崎への原爆投下過程にいたる空爆作戦の変容過程を明らかにしたい。

<新規>研究課題

旧英領カリブの多文化共生社会に関する実証的研究:白人性のオーラルヒストリー分析

研究代表者 伊藤 みちる

所属 国際センター

種目 基盤研究(C)

研究期間 H29-H31



本研究のテーマである白人性とは、白人が非白人に対し根拠のない差異を認め、その自らの優越性を信仰する習性のことを指す。多くの場合、そこに社会的経済的特権を含むが、時代と場所により異なる意味を併せ持つ、流動的な概念である。例えば、2016年の米大統領選で注目された白人至上主義者の非白人に対する排他的な言動は、彼らの白人性を保守する為だと言われている。

旧英領カリブ海の島々は、16世紀以降、ヨーロッパ列強の間で領有権が何度も移動した。その間、アフリカ人奴隷やインド・中国などか

らの年期契約労働者、ヨーロッパの貧困層や政治犯が労働力として導入され、植民地としての開発が進んだ。その結果、植民地政府役人やプランテーション領主であったヨーロッパ系白人とその子孫を絶対的な支配層とする多民族・多文化共生社会が形成された。

本研究は、旧英領カリブ3国(トリニダード・バルバドス・ジャマイカ)における白人性の特徴を明らかにし、その構築過程を比較する。そこから、複合的な社会階層・階級内での人種間の軋轢の中で、どのように白人としてのアイデンティティを構築してきたのかを考察する。

本年度は、トリニダードとバルバドスに赴き、今、記録を始めなければ失われてしまう植民地時代を生き残ったヨーロッパ系市民のオーラルヒストリーと史資料の収集を行う。

社会的強者であり、差別と差別化の根源となる集団である彼らのオーラルヒストリーの分析から、グローバル化が進む現代社会における文明の衝突、偏見や差別の構造を解明し、異文化許容・多文化共生を可能にする個人の態度や社会を実証的に論じる。

<新規>研究課題

十九世紀の絵入本における画文一体構成に着目した書物史研究^{メディア}

研究代表者 高木 元

所属 文学部

種目 基盤研究(C)

研究期間 H29-H32

日本近世小説は製版本(木版画技法)による出板の普及と相俟って、文章のみならず画を多用した絵入本として造本されてきた。とりわけ十九世紀に入ると小説の商品価値が増大し、『南総里見八犬伝』などに顕著であるが、造本にも美しい意匠が凝らされるようになる。口絵や挿絵なども作者の画稿に基づいて浮世絵師が描き、文字通り画文一体化したテキストとしての書物が生産され享受されるようになったのである。

長年に涉って、此等の十九世紀後期の絵入本に関する出板史的な調査

研究を継続してきたが、違和感を禁じ得ないのは、時代区分の問題である。国語教科書の扱いが象徴的である如く、江戸時代は〈古典〉明治以降は〈現国〉。一般的には明治維新を以て〈前近代\近代〉の劃期としている。西洋紙に活字で印刷された洋装本の流布が和装の製版本を凌駕するのは明治二十年代であると思われ、明治三十年代の自然主義隆興などを考え併せると、文学史的にもメディア史的にも十九世紀を一括りにして扱った方が便宜なのである。

近年では絵入本の絵をも読むべきテキストとして扱う立場は一般化

してきた。しかし、従来の十九世紀書物史研究に於いて、概して美術史家は画図にしか興味を示さず、文学研究者は文字列を偏重してきた嫌いが存する。

結果として、小説(読本や草双紙)と同様に戯作者が著述し浮世絵師が描き、やはり地本問屋から出版された画文一体のメディアである浮世絵に記された^{てんし}填詞(解説文)には、全く注意が払われてこなかった。

浮世絵の填詞の調査を通じて、画文一体化した十九世紀書物史の欠落を補うのが本研究の目的である。

<新規>学術図書名

Development of a Methodology for Optimizing the Oral Transmission of Traditional Clothes-Making Techniques in a Preliterate Society

著者 下田 敦子

所属 人間生活文化研究所

種目 研究成果公開促進費(学術図書)

研究期間 H29-H30



世界各地には多数の無文字社会が存在し、そこでかろうじて伝承されてきた伝統衣服・文化とその製作技術は工業社会の進展に伴って現在急速に消失しつつある。本書で扱うタイに住むカレン族の美しい伝統衣服とその製作技術も現在消失の危機に瀕している。その内在的な主要原因には技術伝承の困難さがある。技術習得に長期間(約10年間)を要する大きな忍耐が必要である。彼らは技術伝承に際して文字資料、映像、イラストなどを全く利用せず、その伝承システムの系統性、順次性は充分とはいえ習得し

にくく、非常に後継者を育てにくいのである。本書ではこうした困難を解決するべく、16年間のフィールド調査を経て、4名の最高度の技能者(アブタセアタセ)から技術を伝承し、その集大成としての研究成果を英訳して上梓するものである。本書の特徴を簡条にすると以下の様である。

①カレン族の衣服製作過程を詳細な写真資料、文字資料として記録。また衣服製作用語を文字化して収録。

②衣服製作技術全体を、それを構成する技術要素に分解し、これの一つずつ数量データに置き換えて、統計的解析(項目反応理論)を

施し、個々の技術要素の難易度と、その習得に際しての識別度(落ちこぼれやすさ)を計量化した。

③この解析結果を整理し、易しい技術要素から徐々に難しい技術要素へと学習が進むように、衣服製作の技術系統別に技術の伝承システム全体を配列しなおした。こうすることで学習者は易しい技術要素から、少しずつ段階を追って徐々に難しい技術要素へと習得してゆくことが出来るようになる。この方法を用いて現在、学校教育の中でカレン民族服製作技術の伝承が始まっている。

日本学術振興会 科学研究費助成事業 平成29年度採択課題
▶ 基盤研究(A) (1件)

| 研究代表者 | 所属 | 研究課題 | 研究期間 |
|-------|-----------|--|---------|
| 大澤 清二 | 人間生活文化研究所 | 人が生育する限界的環境に於ける発育発達(生活技術の発達を含む)と成熟の総合的研究 | H27-H30 |

▶ 基盤研究(B) (3件)

| 研究代表者 | 所属 | 研究課題 | 研究期間 |
|--------|-----------|---------------------------------------|---------|
| 柴山 真琴 | 家政学部 | 日系国際児のバイリテラシー形成過程の質的探究とその展開 | H26-H30 |
| 水谷 千代美 | 家政学部 | 臭いの快不快評価定量化の試みと在宅介護不快臭対策への応用 | H29-H32 |
| 下田 敦子 | 人間生活文化研究所 | 東南アジア伝統衣服製作技術体系の解明と伝承教育最適化のためのプログラム開発 | H26-H29 |

▶ 基盤研究(C) (31件)

| 研究代表者 | 所属 | 研究課題 | 研究期間 |
|--------|--------|--|---------|
| 上杉 宰世 | 家政学部 | 中高年女性の健康力と若年期の食生活・生活習慣に関する縦断研究 | H25-H29 |
| 藤村 考 | 社会情報学部 | 属性付きグラフのレスポンス可視化の研究 | H26-H29 |
| 鄭 暎恵 | 人間関係学部 | 「表現の自由」とヘイト・スピーチ法規制をめぐる社会学的研究 | H26-H29 |
| 團野 哲也 | 家政学部 | ユーザーにフレンドリーな高精度3次元ファッション・デザインシステムの開発 | H27-H29 |
| 伊藤 正直 | 社会情報学部 | 1960年代のG10とOECD/WP3 | H27-H29 |
| 正村 俊之 | 社会情報学部 | ガバナンスのリスク社会論・監査社会論的研究——資本主義と民主主義の現代的変容 | H27-H29 |
| 山倉 健嗣 | 社会情報学部 | 制度環境における企業の戦略的対応と組織間関係構築に関する研究 | H27-H29 |
| 荒川 潔 | 社会情報学部 | 移行期における次世代自動車の開発と普及のための税制と規格、規制の理論・実証分析 | H27-H29 |
| 佐藤 実 | 比較文化学部 | 近世中国におけるムスリムの問答体文献の研究 | H27-H29 |
| 渡邊 顕彦 | 比較文化学部 | ラテン語詩と近世初期日本の交差 | H27-H29 |
| 内藤 千珠子 | 文学部 | 日本語文学における検閲とジェンダー | H27-H31 |
| 落合 友四郎 | 社会情報学部 | 金融市場の高頻度データ解析とリスク管理への応用 | H27-H31 |
| 石井 雅幸 | 家政学部 | 星座カメラi-CANを活用した、日本中の小学校で星の学習ができる教材の開発 | H28-H30 |
| 小関 右介 | 家政学部 | 伝統的農法「稲田養魚」の高い米魚生産性を支える生態系プロセスの科学的検証 | H28-H30 |
| 中川 麻子 | 家政学部 | 手芸文化データベースの構築と教育現場への活用 | H28-H30 |
| 須藤 良子 | 家政学部 | エジプト・コプトの染織品とインド更紗の制作年代および制作地の特定に関する研究 | H28-H30 |
| 生田 茂 | 社会情報学部 | 学校の教員と取り組む合理的配慮指針に基づく教材開発と授業手法の開発 | H28-H30 |
| 市村 哲 | 社会情報学部 | 家庭における日々の家事/活動をゲーミフィケーション化する研究 | H28-H30 |
| 上野 未央 | 比較文化学部 | 中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会 | H28-H30 |
| 青江 誠一郎 | 家政学部 | 穀類の摂取による高血圧症の予防効果と腸内代謝を介したメカニズムの研究 | H28-H31 |
| 天野 みどり | 文学部 | 現代日本語の自他に関する構文的研究 | H28-H31 |
| 松村 茂樹 | 文学部 | 近代ボストン美術館における日中米文化交流 | H29-H31 |
| 榎本 恵子 | 文学部 | 17・18世紀フランスにおける文献資料に見るモリエールと古典ラテン喜劇作家の受容 | H29-H31 |
| 松本 暢子 | 社会情報学部 | 住居系市街地の住宅更新における賃貸併用住宅の有用性に関する研究 | H29-H31 |
| 大出 春江 | 人間関係学部 | 日本の出産文化の歴史社会学的研究—リプロダクティブヘルスと助産所の機能を中心に | H29-H31 |
| 福島 哲夫 | 人間関係学部 | スーパーヴァイザー養成のためのメタ・スーパーヴィジョンに関する研究 | H29-H31 |
| 石川 照子 | 比較文化学部 | ジェンダーからみる近代日中女性関係史の総合的研究——月曜クラブと一土会を中心に | H29-H31 |
| 高田 馨里 | 比較文化学部 | 第二次世界大戦期、空爆標的地図にみる米英連合国の空爆戦略の転換 | H29-H31 |
| 伊藤 みちる | 国際センター | 旧英領カリブの多文化共生社会に関する実証的研究：白人性のオーラルヒストリー分析 | H29-H31 |
| 高木 元 | 文学部 | 十九世紀の絵入本における画文一体構成に着目した書物(メディア)史研究 | H29-H32 |
| 小林 実夏 | 家政学部 | 育児期の女性の精神的社会的要因や地域・家族の支援と子どもの食環境や発達との関連 | H29-H33 |

▶ 挑戦的萌芽研究 (4件)

| 研究代表者 | 所属 | 研究課題 | 研究期間 |
|--------|------------|---------------------------------------|---------|
| 水谷 千代美 | 家政学部 | 寝たきり高齢者のQOL改善のための機能性繊維の応用に関する研究 | H27-H29 |
| 五味 典嗣 | 文学部 | 日中戦争の記憶と表象に関する総合的研究——1940-1960年代を中心に | H27-H29 |
| 高橋 寿美子 | 人間生活文化研究所 | 作家の計量分類による日本近現代文学史の構築 | H27-H29 |
| 寺石 雅英 | キャリア教育センター | リアルオプション・アプローチを用いたプロスポーツチームの価値評価手法の開発 | H27-H29 |

▶ 若手研究(B) (6件)

| 研究代表者 | 所属 | 研究課題 | 研究期間 |
|--------|--------|--|---------|
| 松本 早野香 | 社会情報学部 | 「語り」の蓄積からコミュニティの物語を出力する地域デジタルアーカイブの構築と運用 | H27-H29 |
| 久保 忠行 | 比較文化学部 | 民族誌的アプローチにもとづく難民の定住プロセスの国際比較研究 | H27-H29 |
| 赤松 美和子 | 比較文化学部 | 台湾ニューシネマとそれ以降の台湾映画における「日本時代」表象研究 | H27-H30 |
| 宮崎 美智子 | 社会情報学部 | 視線随伴パラダイムを用いたAgency調整システムの発達過程の解明 | H28-H30 |
| 山本 真知子 | 人間関係学部 | 里親養育における里親と実子の意識とその支援のあり方 | H28-H31 |
| 古川 敏明 | 文学部 | ハワイ語ラジオ番組を事例とする危機言語の復活とメディア利用に関する会話分析的研究 | H29-H32 |

▶ 研究活動スタート支援 (1件)

| 研究代表者 | 所属 | 研究課題 | 研究期間 |
|-------|------|---------------------|---------|
| 林 明子 | 家政学部 | 貧困世帯の若者の移行と家族に関する研究 | H28-H29 |

▶ 特別研究員奨励費 (1件)

| 研究代表者 | 所属 | 研究課題 | 研究期間 |
|--------|--------|-------------------------------|---------|
| 小川 真理子 | 社会情報学部 | DV被害者支援と民間シェルターにおける米・加・日の比較研究 | H28-H30 |

▶ 研究成果公開促進費(学術図書) (1件)

| 研究代表者 | 所属 | 研究課題 | 研究期間 |
|-------|-----------|--|---------|
| 下田 敦子 | 人間生活文化研究所 | Development of a Methodology for Optimizing the Oral Transmission of Traditional Clothes-Making Techniques in a Pre-literate Society | H29-H30 |

国際学術研究・協力・交流事業

■ ミャンマー国立民族大学との交流

人間生活文化研究所では科研費によるミャンマー調査の一環として、2016年12月よりミャンマー国立民族大学(正式にはUniversity for the Development of the National Races of the Union)との共同研究、交流事業を開始しました。同大学はミャンマー西北部のかつての首都であったザガインの郊外にあります。アジアの大河エイヤワディー河(イラワジ河)の河畔にゆったりとしたキャンパスを展開しており、83民族から選抜された男女1400名の学生が、5年間全寮制で教員と起居を共にしています。12月には大澤所長が全教職員、学生を対象に講演会を行いました。今後同大学の教員を対象にした研究方法の訓練を定期的に行うと共に、学生に対して民族調査の方法を教授することになっています。また、共同研究として、「ミャンマーにおける家庭科教育の開発」「学校保健・環境改善の推進」「発育発達研究」などのプログラムを用意しています。さらには、同大学の民族博物館、大学図書館への支援活動を計画しております。



講演を終えて民族大学学長と(写真右)

研究課題

消臭抗菌抗アレルギー繊維の機能性評価と介護医療分野への応用

研究代表者 水谷 千代美

所属 家政学部

種目 基盤研究(B)

研究期間 H26-H29



我が国は、高齢者の占める割合が全人口の20%以上を超えており、今後も急速に高齢化が進むと予想されている。我が国の寝たきり高齢者の人口が福祉先進国(デンマーク・スウェーデン)よりも圧倒的に多く、高齢の介護者が高齢の被介護者を介護するという介護負担の増大が深刻な社会問題となっている。寝たきり状態になると生活の大半をベッド上で過ごすために排泄物臭や体臭などの悪臭が発生し、病院や高齢者施設内では悪臭が問題視されている。また、寝たき

り高齢者は体重による圧迫が特定部位に長時間加わるために褥瘡(床ずれ)や皮膚疾患が現れ、それらの対策が必要とされている。本研究は悪臭と皮膚疾患に焦点を置き、消臭抗菌抗アレルギー繊維を用いてこれらの問題を解決することを目的とした。

まず、悪臭に対しては、病室内の温度、湿度、換気量および風速をシミュレーションした環境を作り、消臭性繊維の悪臭の対する消臭効果を調べた。人間の皮膚には表皮ブドウ球菌や黄色ブドウ球菌な

どが常在菌として存在し、中でも黄色ブドウ球菌が悪臭の発生や皮膚のかゆみなどに密接に関係することがわかっている。次に、消臭抗菌抗アレルギー繊維の黄色ブドウ球菌に対する抗菌性を調べ、優れた抗菌効果があることがわかった。これらの結果をもとに、消臭抗菌抗アレルギー繊維が高齢者やアレルギー性皮膚炎患者の皮膚にどのような効果を与えるか調べているところである。

研究課題

栄養士養成施設卒業生、在校生の健康リスクとBMI、体脂肪率に関する横断・縦断研究

研究代表者 小林 実夏

所属 家政学部

種目 基盤研究(C)

研究期間 H25-H28



他の先進国に比べて、わが国の青年期女性にはBMI<18.5のやせの者の割合が高く、一方でBMIが低いあるいは標準であるにもかかわらず体脂肪率が高い、いわゆる隠れ肥満の者も少なくない。

本研究の対象者は、栄養士養成施設卒業生、在校生であるため、栄養士という専門職に対する職業意識、キャリア志向の違いや就労状況、家庭生活の違いによるやせと健康リスクの差について検討することが可能である。栄養士養成施設卒業生を対象とした研究では、同一対象者の縦断的データを用いて検討することによって、観測時点(中高年期)の状態が過去

(青年期)の状態の評価に影響を与える可能性や、回答者の記憶の正確さがデータの信頼性に影響を及ぼす問題が回避されるため、バイアスの少ないデータを用いて、青年期から中高年期までの30年間以上の食習慣・生活習慣・健康度の相互関連性について検討することができた。栄養士養成施設在学学生を対象とした研究では、研究代表者が同調査法で同時期に実施した1000名以上の調査データが構築されてあるため、青年期の体格と食習慣、生活習慣との関連について、精度、正確度の高いデータ解析ができた。

栄養士養成施設卒業生(n=169)

を対象とした縦断研究の結果、青年期標準体型(18.5≤BMI<25)であった対象者の中で、中年期以降のBMIがやせ(BMI<18.5)に分類された者は10.9%、肥満(BMI≥25)に分類された者は8.8%であった。青年期のやせの割合は9.7%であり、当時(1979年)国民栄養調査結果(22歳女性)のやせの割合(14.4%)より低かった。中年期以降の肥満の割合は9.6%であり、2014年国民健康栄養調査の結果(50代女性)の肥満の割合(23.7%)より低かった。本研究の結果から専門的知識の習得により適切な体型が維持できていることが明らかとなった。

研究課題

地方青年結社における「文」の実践に関する社会史研究

研究代表者 木戸 雄一

所属 文学部

種目 基盤研究(C)

研究期間 H26-H28



1880～90年代の地方青年結社で書かれた文章は、多様なジャンルにまたがっている。これらのテキストは、和・漢・欧の文脈を交差させながら、新たな文章を生み出しつつあり、その総体を本研究では「文」と仮に呼ぶ。本研究は地方青年結社で行われていた「文」をめぐる多様な社会的実践を検討することで、1900年前後に顕著となる地方文学青年の活動を地方における多様な社会的実践の一部として再認識する基盤を構築することを目的とした。

研究に当たって①地方青年の

「文」をめぐる活動を分析できる資料の発掘と収集、②国民的な「文」の平準化に直面した地方青年結社の言語的実践活動の分析、③地方青年の「文」を出版の主軸に据えた東京の群小出版社の分析、という軸を設定し、地方所在資料の探索やデータベースの作成を中心に研究を行った。

本研究によって、以下の成果を発表した。「明治期地方文学資料の翻刻と解題(一) - 福島県喜多方市「文学研究会」資料・『愛重遺稿』上 -」(『大妻女子大学紀要-文系-』48号、2016年)、「同(二)」(同

49号、2017年)は、地方青年結社の具体的な活動を示す資料として文章回覧誌および活動資料を発掘し、一部を翻刻した。福島県山間部の青年達による貴重な活動記録は今後も引き続き調査研究を要する資料である。また、青年達の主要なコミュニケーション手段の一つであった文語体書簡文が構築する共同性について「『青年』の連帯の失効-国木田独歩「おとづれ」と「青年」の手紙-」(『大妻国文』48号、2017年)で検討した。

研究課題

集团的尊敬による集団間紛争解決過程の解明

研究代表者 熊谷 智博

所属 文学部

種目 基盤研究(C)

研究期間 H26-H28

戦争や民族紛争といった集団間紛争は、社会心理学において比較的古いテーマです。その中でも対立相手のイメージを改善する事によって競争的・対立的態度を好転させて紛争を解決するというアプローチはこれまで大きな成果を挙げてきました。しかし実際には対立してきた相手のイメージを好転させるというのは様々な努力が必要であり、それが集団間の和解の障碍となっていました。

そこで本申請課題では外集団に対する和解的態度を自発的に生じさせる心理過程として、「自集団が

尊敬されている」という認知の影響を検討しました。これは他者からの尊敬は人間の基本的欲求であるため、人々はそれを自発的に求め、それに対して拒否反応を示すことはないだろうと予測したためです。質問紙を用いて3年間で全国規模の調査は3回、大学生を対象とした予備調査を数回行いました。それらの調査において一貫して見られた結果は、対立集団からの尊敬はその集団に対する「温かさ」特性認知を強め、それを介して紛争行為に対する罪悪感と羞恥心を強め、最終的には対立集団に対する謝罪と補償へ

の支持的態度を強めるというものでした。この結果は尊敬されているという感覚によって相手に対する認知を「間接的に」変化させ、それが和解的態度を強化するという、当初の予測を支持するものでした。今後は国際比較を通じてこの心理過程の普遍性を検討しつつ、実験室実験も用いて尊敬が生む「安心感」の影響についても検討する予定です。

研究課題

属性付きグラフのレスポンス可視化の研究

研究代表者 藤村 考

所属 社会情報学部

種目 基盤研究(C)

研究期間 H26-H29



ネット上に蓄積されている膨大なデータの多くは、テーブル型の構造ではなく、多様性を持つネットワーク型のデータ構造を有している。属性付きグラフとは、このようなネットワーク構造のデータで、ネットワークのノードとエッジに対して、さらに多数の属性が付与されたデータモデルである。本研究はこのような属性付きグラフの生成過程のダイナミクスを可視化するものであり、H28年度末までにCypherVis3Dと呼ぶ可視化ツールを開発した。本ツールは、可視化のターゲットとしている属性付きグラフにはできるだけ制約

を設けずに、汎用的なツールとなるように開発してきた。この汎用性を実現するため、属性付きグラフを格納するデータベースとして、近年、急速に普及が進んでいるグラフデータベースNeo4jを利用し、可視化対象のデータを一旦Neo4jに格納し、そこから可視化対象のサブグラフを抽出して可視化するアーキテクチャを採用した。Neo4jではCypherと呼ぶ、データベースに格納された大規模なグラフから、ノードやエッジの抽出条件を指定するクエリ言語を備えている。このアプローチによりCypherでサブグラフのエッジの抽

出順序を指定することで、様々な観点からエッジやノードの発生のダイナミクスをアニメーションとして表現することが可能になった。これまでパナマ文書やオープンソースコミュニティのGitHubのリポジトリの可視化などに適用し、WebサイトやYouTubeなどでその可視化結果を見られるようにした。今後は、より様々なコンテンツの可視化にご活用いただけるように、本ソフトウェアを整備していく予定である。

研究課題

ユーザーにフレンドリーな高精度3次元ファッション・デザインシステムの開発

研究代表者 團野 哲也

所属 家政学部

種目 基盤研究(C)

研究期間 H27-H29

衣服はヒトが長年にわたり獲得してきた装置系、制度系と言ってよく、その意味では衣服を文明と呼んで差し支えない。健康で快適な衣生活を送ることは人類の永遠のテーマであって、ヒトは風土や生活様式にあった衣生活を営んできた。一方で超高齢社会に突入した日本では、たとえば高齢者の日々の装いは重要な課題である。なぜなら広い意味での被服は、生活者の心理に深く入り込み、喜怒哀楽の感情だけではなく、内分泌等の生理学的作用にも影響を及ぼすことが知られている。年齢とともにヒトの体型は変化し、個人差も大きくなっているので、

現時点の自分にピッタリした服を安価に手に入れることが、社会的にも求められている。

本研究課題では、以上のような社会の要請に応えるために、生活者が簡単な操作で自分に合った服をオーダーできるような総合的システムの構築をめざして、ファッション・デザインシステムを開発している。本研究課題で具体的に取り扱っているのは、女性のスカートである。これまで得られた成果としては、タイトスカートからフレアスカートへの自動型紙展開が可能なソフトウェアを開発した。また、素材や体形、フレア量をパラメータとして実際に縫製

したスカートの三次元位置計測から、幾何学的特長量を数学的に抽出してその比較を行い、生活者の感性用語との対応を検討した。さらに、実際に縫製したスカートから抽出した、素材、体形、型紙の情報をコンピュータの仮想空間に再現して、シルエットの計算結果と実際のスカートのシルエットとの比較を行っている。

研究課題

1960年代のG10とOECD/WP3

研究代表者 伊藤 正直

大妻女子大学 学長

種目 基盤研究(C)

研究期間 H27-H29



1970年代以降の金融危機対策において主要国の国際政策協調が大きな役割を果たしてきたことは、よく知られています。1970年代初頭の国際通貨危機の際には、G10、G10Dのなかで、アメリカとヨーロッパ諸国が激しく対立し、そのなかからIMFC20やG5が生まれました。また、1982年の中南米危機や1997年のアジア通貨危機に際しては、IMFや米財務省を中心にいわゆるワシントン・コンセンサスが形成されました。さらに、2008年のリーマンショックに際してはそれまでのG7に代わってG20

やFSBが創出されました。これらの政策や組織が果たした機能と役割については、IMFやその他の国際金融組織が発表してきたいくつかの報告書や論文、国際金融論や国際政治学の研究者の多くの論文によって、その内容はほぼ知られています。しかし、こうした国際政策協調の前段階であり、前提となった1960年代のG10やOECD/WP3、BISの果たしてきた役割については、その内実は現在でもほとんど知られていません。本研究は、最近ようやく公開が始まったOECD/WP3の一次資料、BIS

のG10関連資料、米NAのG10関係資料などにより、この過程を明らかにしようとするものです。2015年度のパリOECD調査、シンガポール金融庁調査、2016年度のバーゼルBIS調査などの海外調査、BIS他海外研究者との協同も順調に進んでおり、発掘資料の公開や研究の取りまとめに順次入りたいと考えています。

研究課題

欧米並びにアジアとの比較を介した日本近代文学及び映画における死の表象の再構築

研究代表者 城殿 智行

所属 比較文化学部

種目 挑戦的萌芽研究

研究期間 H26-H28

あらゆる媒体に膨大な死の表象が流通する近代において、人は単に臨床医学の限界で物理的に死ぬだけでなく、むしろそうした死の表象を情報として散漫に消費することで、実際には己の死そのものからだけは目をそらして生き、やがては決して直視しえなかった己の死という個別性自体をも、統計学的な知見に基づく臨床医学に譲り渡して、死んでいく。現在一般化したそのような生と死のあり方こそ、近代における死の表象の生産と流通がもたらす避けがたい効果として、知的に分析されるべきではないか。

1970年代以降に臨床の場で端緒についた死生学においても、いまだに表象分析の観点は不十分であるため、日本近代文学および映画が死をどのように表象し、時代に応じていかにそのイメージを変質させていったのか、同時代の欧米並びにアジアにおいて生産された表象との差異として歴史的に把握することにより、近代社会において消費される死の表象の意味を、明らかにしようと考える。

方法的には、ハイデガー以後の実存主義およびアリエス以後の歴史的なイメージ分析を踏まえた上で、言語と視覚表象の乖離を前提

として近代を語るフーコーの認識論と、ラカン派精神分析の批判的な理解に、研究の基礎をおいた。その意味で、本研究は、言語と視覚における、二重化された表象の不可能性を介して、近代における超越的な審級のイメージ形成を対象化する試みであった。研究成果として、日本近代における主体と視覚の国家的な編成を従来にない形で論じ、より政治的・歴史的な観点にもとづく表象分析の必要性を導いた。

研究課題

ハワイ語ラジオ番組の相互行為分析

研究代表者 古川 敏明

所属 文学部

種目 若手研究(B)

研究期間 H25-H28



言語学の分野では、消滅の危機に瀕する言語の記述・保存を行うとともに、言語理論とも関連付けて論じることが課題となっている。本研究は危機言語であり、言語再活性化の成功例として知られるハワイ語に関し、調査の進んでいない学校教育以外の場面、特にマスメディアにおけるハワイ語使用について、相互行為研究の視点から調査することを目指した。

ハワイ語は他の危機言語と比べ、膨大な言語資料を有する。その最たるものが、1972年から1988年にかけて全417回放送されたラジオ番組Ka Leo Hawai'i(ハワイの声)の音声

データである。同番組は年配の話者をゲストとして招き、先住民の言語文化の記録・保存を目的としていた。

本研究の主な成果は以下のとおりである。

- ①番組に関する情報を整理・集約し、出演者の出生地、言語的影響を受けた場所など、番組の全容をまとめた論文を発表した。
- ②ハワイ先住民文化を専門とする研究協力者数名の助力を得て、28回分(約31時間)の音声データを文字化した。
- ③Ka Leo Hawai'iの元パーソナリティであり、現在、ハワイ大学ヒロ校の研究者であるラリー・カウアノエ・

キムラ氏との共同プロジェクトとして、文字化したデータの公開を進めている。

④ハワイ語を含む多言語な言語実践に関し、会話中の言語選択および切り替え、物語の協働的構築、地理的課題の効果と帰結に着目して相互行為分析を行った。

今後は、上記の研究課題を継続しつつ、年配の話者をゲストに迎えることが困難になった1990年からの番組第2期において、当時の若者たちを中心とする第2言語としてのハワイ語使用に着目した調査を実施する予定である。

研究課題

少年犯罪の社会問題化とその収束に関する社会学的研究

研究代表者 牧野 智和

所属 人間関係学部

種目 若手研究(B)

研究期間 H26-H28

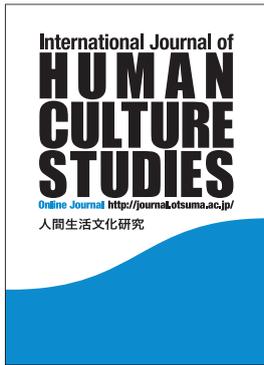
1997年に発生した神戸・連続児童殺傷事件を皮切りに、いくつもの少年事件が社会の耳目を集め、少年法の改正といったリアクションや、治安意識の悪化に影響を及ぼしてきました。当時多く語られた「心の闇」という言葉は、もはや惰性的に用いられている感もありますが、2010年代中頃になっても不可解な少年事件の枕詞として用いられ続けています。治安意識もかつてほどではないにせよ、未だ悪印象を持つ人々が多い傾向にあります。実はこの20年間、少年犯罪は統計的に改善傾向にあるのですが、そうした動向は一般的には看

取されず、認識枠組という点では私たちの社会は少年犯罪をめぐる「失われた20年」の最中に未だ居続けているといえます。

こうした状況を踏まえ、本研究課題では第一に、神戸事件報道の再検証を通して、この社会がこの20年来保持している少年犯罪への認識枠組がいかにして成り立ってきたのかを考察してきました。第二に、メディア上では2010年代になり、少年事件の報道量がかつてよりも減少しているのですが、そのような減少がなぜ起こったのかについても考察してきました。後者について分かりやすいところを紹介す

ると、2011年の東日本大震災による社会面の占有が報道量の縮小と関係しているのですが、これはある事象への社会的注目は、震災に限られない同時代的な事象のなかで相対的に決定されるということを示しています。ある事象は本質主義的に認識されるべきではなく、他でもありえた可能性に多くの場合開かれているということ。このような本研究の知見は、メディア・リテラシーの涵養に貢献するものと考えています。

オンラインジャーナル『人間生活文化研究:International Journal of Human Culture Studies』



本誌では「人間の生活と文化」に関わる研究論文の投稿を随時募集し、これまでに約180編の論文を掲載してきました。トピックは、被服学、食物学、児童学、ライフデザイン学、日本文学、英文学、コミュニケーション文化学、社会情報学、人間関係学、人間福祉学、比較文化学など広範囲に渡ります。
最新号では掲載論文中、半数近くが本学外からの投稿によるものでした。
以下、一覧をご参照ください。

【ご案内】本誌「原著論文」「短報」のピア・レビューについて
査読付きの論文(原著論文、短報)の投稿時に投稿者は査読者3~5名を推薦できます。但し、同一研究室の研究者や師弟関係にあたる研究者などの利害関係者を除きます。推薦された査読者は査読者選定の参考にします。
投稿についてはこちら↓をご覧ください。
>> <http://journal.otsuma.ac.jp/>



- 投稿無料
- 随時募集
- 投稿資格制限なし
- 原著論文・短報は査読あり
- 字数制限なし

No.27(2017) 掲載論文一覧

▶ 原著論文

| 論 題 | 著 者 |
|---|-----------------|
| 衣服設計用着衣モデル生成のための基礎研究 ―身頃部分の検討― | 土肥 麻佐子(短期大学部) |
| 運動様式の異なる一過性運動が中年女性の気分に及ぼす影響 ―ボクシングとヨガを取り入れた運動プログラムの場合― | 早川 洋子(東京国際大学)ほか |

▶ 短 報

| 論 題 | 著 者 |
|---|--------------|
| 食餌性肥満モデルマウスにおける肝臓脂質蓄積および軽度炎症に及ぼすロイシンとバリンの効果 | 工藤 陽香(大学院)ほか |

▶ 報 告

| 論 題 | 著 者 |
|--|--|
| 長編アニメーション映画『崖の上のポニョ』の構造分析 ― 2編の小さな異郷訪問譚の接合 ― | 大喜多 紀明(京都市民俗学会) |
| Fluorescence imaging-based analysis of the mitochondrial permeability transition pore opening in cardiomyocyte-derived H9c2 cells | Iyuki Namekata (Toho University) et al. |
| 多様化する社会において大学の果たす役割を考える ―個性を重視した高等教育の実現に向けて― | 川合 宏之(流通科学大学) |
| 青年期から中年期の成人における犬の飼育状況と健康関連QOLとの関係 ―犬の主たる飼育者とペットの非飼育者の比較― | 早川 洋子(東京国際大学)ほか |
| The transfer of hairdressing skills and techniques ―The necessity of technical guidance for hairdressing instructors― | Seiji Kawano (Yamano College of Aesthetics) et al. |
| Management evaluation system for skill assessment ― On the psychological interaction between the "Teaching side" and "Learning side" in the teaching methodology of hairdressing techniques ― | Seiji Kawano (Yamano College of Aesthetics) et al. |
| 福祉分野における家政学教育のあり方(第1報) ―「手づくり」のすすめ― | 桐原 美保(人間関係学部)ほか |
| 美容実習教育担当者に期待される能力 | 河野 誠二(山野美容芸術短期大学) |
| 技術系職場・学校における指導方法 ―その現状と問題点・解決方法― | 河野 誠二(山野美容芸術短期大学) |
| 福祉分野における家政学教育のあり方(第2報) ― 生涯学び続ける技能の継承 ― | 桐原 美保(人間関係学部)ほか |
| 描く楽しみが広がる「紙アプリ」を用いた教育実践 ―全国の学校の先生との共同の取り組み― | 生田 茂(社会情報学部)ほか |
| 崇徳院の『久安百首』について ―四季部と恋部を中心に― | 柏木 由夫(文学部) |
| 「情報的な見方・考え方」の枠組みに沿ったモデルカリキュラムと教材の提案 | 本郷 健(社会情報学部)ほか |
| 学校の先生と取り組む合理的配慮指針に基づく手作り教材の制作と教育実践 | 生田 茂(社会情報学部)ほか |
| 日本からの手紙 ―ハワイ先住民が綴った19世紀末の日本― | 古川 敏明(文学部) |
| 栄養士養成課程における献立作成能力に関する研究 第3報 ―学生が作成した献立の実態と課題― | 蓮見 美代子(短期大学部)ほか |
| 小鹿歌舞伎における三番叟について(1) ―その歴史的背景をさぐる― | 安倍 希美(北里大学) |
| 合理的配慮指針に基づく教材と授業手法の開発 ―海外の研究者との共同の取り組み― | 生田 茂(社会情報学部) |
| 短編アニメーション作品『On Your Mark』の裏返し構造 ―宮崎作品にみられる特徴― | 大喜多 紀明(京都市民俗学会) |
| 「キャリア心理学セミナー」の授業概要と意義 ―心理学教育を通じた社会人基礎力の育成― | 西河 正行(人間関係学部)ほか |
| 地域連携デジタル・ネットワーキングに関する研究 ―平成28年度の「灰干しがつなく被災地連携ネットワーク」の展開― | 干川 剛史(人間関係学部) |

▶ 資 料

| 論 題 | 著 者 |
|-----------------------------|----------------|
| 外集団尊敬に対する愛着不安傾向の効果 | 熊谷 智博(文学部) |
| 特別支援教育と普通教育の狭間で ―キャリア教育と療育― | 川合 宏之(流通科学大学) |
| 化学繊維がアレルギー性皮膚炎患者の皮膚に与える影響 | 水谷 千代美(家政学部)ほか |
| 中国におけるジオパーク研究の動向に関する一考察 | 肖 銀(北海道大学) |

(2017年6月30日現在)

大妻女子大学 戦略的個人研究費

大妻女子大学教員の研究活動の活性化・高度化、競争的外部資金への応募促進を目的とした助成制度です。助成の対象は、本学の専任教員による個人研究。平成26年に新設され、人間生活文化研究所は本学総務グループと協働して管理・運営に当たっています。

平成29年度 学長要望課題「大学教育の改善に関する研究」(9件)

| 氏名 | 所属 | 研究課題 |
|--------|------------|--|
| 井上 俊也 | キャリア教育センター | 学習を可視化するeラーニングシステムの開発 |
| 大網 美代子 | 家政学部 | 主体的な学びのための持続的デザインシステム—明治期におけるドレスの構成と縫製— |
| 堤 江美子 | 社会情報学部 | 仮想現実(VR)技術を用いた三次元CG教育における空間認識力の調査と育成 |
| 西河 正行 | 人間関係学部 | 正課外教育における大学生の精神的不適応に対する予防グループの試み—同好会組織の活用を通して— |
| 服部 孝彦 | 英語教育研究所 | 大学での英語教育におけるクリティカル・シンキング力を育成するための研究 |
| 彦坂 令子 | 家政学部 | 女性管理栄養士が有するキャリア発達上の課題 |
| 久富 陽子 | 家政学部 | 実習における学生の学びの実態と特別な支援を必要とする子どもたちへの指導に関する検討 |
| 武藤 哲郎 | 短期大学部 | 英文学系授業における学修成果の可視化について |
| 矢野 博之 | 家政学部 | 小学校教職課程の基盤とする学校体験活動の意義とその設置・運営の在り方 |

平成29年度 採択課題(37件)

| 氏名 | 所属 | 研究課題 |
|--------|--------|---|
| 青江 誠一郎 | 家政学部 | 発酵速度の異なる食物繊維成分がラットの腸内細菌叢および腸内代謝産物に及ぼす影響 |
| 阿部 和子 | 家政学部 | 乳幼児の保育園生活における「発達経験」の検討—育みたい資質・能力の視点から— |
| 生田 茂 | 社会情報学部 | 合理的配慮指針に基づく教材と授業手法の開発—国内外の学校の先生との共同の取り組み— |
| 石井 雅幸 | 家政学部 | Nature of Science を理解する小中学校理科単元展開の開発研究 |
| 市川 博 | 家政学部 | 高等教育におけるオープンコースウェアの効果 |
| 伊藤 みちる | 国際センター | カリブ海における白人性の構築：バルバドスとトリニダードの比較研究 |
| 井上 修一 | 人間関係学部 | 意思確認が困難な特別養護老人ホーム入居者のストレス把握と除去に関する研究 |
| 井上 淳 | 比較文化学部 | EUに対する歴史的制度主義アプローチ再考：市場統合における統合、停滞、再統合 |
| 上野 優子 | 人間関係学部 | ポールウォーキングを用いた歩行能力の改善 |
| 榎本 恵子 | 文学部 | 文学と画像学からヘラクレスとしてのルイ14世の意味を解明する |
| 大西 一也 | 家政学部 | アメリカ・ポートランドにおけるライフスタイル形成と地域コミュニティに関する研究 |
| 興津 妙子 | 文学部 | ザンビア都市スラムにおける就学前教育の普及と質の向上に関する研究—低学費私立幼稚園の台頭に着目して— |
| 城殿 智行 | 比較文化学部 | 死と超越の表象を主題とする比較文化研究の基盤整備 |
| 熊谷 智博 | 文学部 | 集団間紛争解決における第三者の影響に関する社会心理学研究 |
| 甲野 毅 | 家政学部 | 緑地保全活動の心理的・生理的な効用 |
| 小林 実夏 | 家政学部 | 青年期タイ人の食事評価に関する研究 |
| 五味洲 典嗣 | 文学部 | 対抗的記憶のトランスナショナルな接続に向けて |
| 里見 脩 | 文学部 | 台湾総督府における言論統制—台湾日日新報を通して— |
| 小治 健太郎 | 家政学部 | アスリートにおける腹部BIA(bioelectrical impedance analysis)法による内臓脂肪面積と食習慣、生活習慣との関係 |
| 高橋 ゆう子 | 家政学部 | 自閉症スペクトラム児と養育者の関係性の発達を支えるオープンダイアログの検討 |
| 高橋 コリア | 短期大学部 | アイデンティティと食教育 |
| 竹内 知子 | 短期大学部 | RNAの細胞質内局在化に関わる因子の探索 |
| 武田 千夏 | 比較文化学部 | 啓蒙主義フランスにおけるスタール夫人と政治的リベラリズム：19世紀コミューナルリベラリズム |
| 田中 直子 | 家政学部 | 骨格筋細胞への脂肪蓄積に栄養状態が及ぼす影響 |
| 田中 優 | 人間関係学部 | ボーイスカウトにおける教育効果に関する研究2 |
| 丹野 真紀子 | 人間関係学部 | 介護支援専門員に対するスーパーバイザー養成プログラムに関する研究 |
| 趙 方任 | 国際センター | 素質教育と国民性格の関係に見える日中文化の深層 |
| 手呂内 伸之 | 短期大学部 | Nod ファクター系遺伝子の発現の解析 |
| 平野 貴大 | 人間関係学部 | グラフデータベースを用いた介護業務のモデル化の検討 |
| 福島 哲夫 | 人間関係学部 | カウンセラーの介入の違いによるカウンセリング効果の違いに関する実験・実践研究 |
| 古川 敏明 | 文学部 | ハワイ語新聞の言説分析 |
| 干川 剛史 | 人間関係学部 | 地域連携デジタル・ネットワーキングに関する研究 |

| 氏名 | 所属 | 研究課題 |
|-------|--------|-------------------------------------|
| 堀江 正一 | 家政学部 | D-, L-アミノ酸微量分析法の構築と発酵食品中の実態調査 |
| 本田 周二 | 人間関係学部 | 世代間, 文化間比較による友人関係の特徴に関する実証的研究 |
| 松村 茂樹 | 文学部 | 呉昌碩と日本人士 |
| 松本 暢子 | 社会情報学部 | 東日本大震災後の住宅復興における居住支援とコミュニティ形成に関する研究 |
| 森岡 修一 | 文学部 | ヴィゴツキーの文化・歴史的理論とロシアの補充教育 |

人間生活文化研究所 研究費助成事業

人間生活文化研究所では、大妻女子大学の教職員、大学院生、研究員を対象に、さまざまな研究費助成制度を設けています。

■ 共同研究プロジェクト

学内における研究者間交流の促進、新たな研究課題の発掘、競争的外部資金への応募促進を目的とする助成制度です。助成の対象は、本学の専任教職員を代表者とする共同研究。異分野の研究者で構成されるこのプロジェクトでは、平成20年度からこれまでに200以上の研究課題が遂行されてきました。



平成29年度 採択課題 (17件)

| 氏名 | 所属 | 研究課題 |
|--------|---------|---|
| 青江 誠一郎 | 家政学部 | 各種食物繊維源を摂取したマウスの腸内細菌代謝産物に関する研究 |
| 石井 雅幸 | 家政学部 | 子どもに問題発見力を育てる指導法の基礎的な研究—小学校理科の教科書分析を基にして— |
| 伊藤 みちる | 国際センター | 『ごもくめし』の留学生誘致のための効果的な広報戦略ツールとしての可能性 |
| 上杉 幸世 | 家政学部 | 学童期小児における運動器発達と食事・生活状況の関連 |
| 大網 美代子 | 家政学部 | 機能美に特化した身障者と健常者が共有できる服の開発研究II |
| 大西 一也 | 家政学部 | 日本におけるライフスタイル形成とコミュニティスペースに関する事例研究 |
| 小林 実夏 | 家政学部 | 青年女性の主観的・客観的慢性疲労の評価 |
| 高垣 佐和子 | 博物館 | 大妻精神の継承と具現—聞き取り調査を通じ大妻の教え・学びを探る 2— |
| 田中 直子 | 家政学部 | 脂肪滴とミトコンドリアの形態変化からみる脂肪細胞の健康度: フローサイトメトリーによる解析 |
| 中川 麻子 | 家政学部 | 女性が選好するアメニティ空間と家具に関する研究(4) |
| 服部 孝彦 | 英語教育研究所 | 高大を連携した英語教育における論理的思考力育成に関する研究 |
| 細谷 夏実 | 社会情報学部 | 「海育」の取り組み: 「お魚カード」による海育と食育のコラボレーション |
| 堀場 愛弓 | 家政学部 | 女子大学生が快適に過ごせるキャンパスデザインの研究(2) |
| 本郷 健 | 社会情報学部 | プログラミングの学習が脳の変化に与える影響の基礎的研究 |
| 本田 周二 | 人間関係学部 | 日本の大学における教育カリキュラムの体系化—心理学分野に着目して— |
| 松村 茂樹 | 文学部 | アジア太平洋地域における学生の職業選択に関する総合的研究 |
| 水谷 千代美 | 家政学部 | 介護臭の分析とニオイの感性的評価 |

■ 研究員研究助成

本研究員研究員の競争的外部資金への応募を促進することを目的とした助成制度です。この制度は、平成26年度より競争的研究費として再出発しました。

平成29年度 採択課題 (7件)

| 氏名 | 研究課題 |
|-------|---------------------------------------|
| 伊藤 幸恵 | 豆乳乳酸菌発酵物のヒト介入試験による腸内細菌叢の解析ならびに代謝産物の測定 |
| 大西 竜子 | 食物繊維に富む沖縄県産食物の探索と成分解析ならびに機能性 |
| 築館 香澄 | 茶に含まれる食物繊維の機能性について |
| 戸田 里和 | 健康寿命の延伸とキャリア教育の関連 |
| 中西 純 | ネパールにおけるベジタリアンの子どもの発育発達に関する研究 |
| 仁科 薫 | 「就職氷河期世代」の母親たちの抱える困難とニーズ |
| 柳内 志織 | 天ぷら衣に関する研究 |

お知らせ

■ 私立大学図書館協会「寄贈資料搬送事業」に採択されました!!

当研究所では、ミャンマー連邦共和国国立図書館に対する資料整備支援事業を行っています。その事業の一環として、昨年度初めて、本学図書館と協働して私立大学図書館協会「寄贈資料搬送事業」に申請し、第1回、第2回ともに採択。今年度も5月に同事業に申請したところ採択され、約660冊の英文学術研究図書をミャンマー連邦共和国地域開発民族省民族大学図書館(同国、ザガイン管区)に送り届ける予定です。



図書を寄贈する民族大学図書館とそのスタッフ

■ 大妻女子大学博物館への協力

今秋、大妻女子大学博物館の平成29年度企画展「世界と日本の履きもの(仮)」に人間生活文化研究所が協力します。

当展では、人間生活文化研究所の前身の人間生活科学研究所第4代所長を務めた人類学者・近藤四郎先生〔1918-2003〕が収集した履きもの標本を含む100数点が展示されます。

会期：10月25日～12月3日(予定)

主催：大妻女子大学博物館(東京都千代田区三番町7-8、Tel 03-5275-5739)



人間生活文化研究所 研究費助成事業関連 カレンダー 2017

| | 科研費申請講座「科研塾」 | 戦略的個人研究費 | 共同研究プロジェクト | 研究員研究助成 |
|-----|--|--|---|--|
| 7月 | 7.28 17:30～19:00 H29 第2回科研塾 (於 千代田キャンパス) 【内容】申請の基礎知識 ※申請内容に関する相談、専門家による申請書の添削は、随時受け付けています。 | | 7.11 H29 夏季休業前の予算執行伝票等の研究所受付締切(17時迄) | |
| 8月 | | | 8.4 夏季休業開始 | |
| 9月 | | | 9.11 H29 予算執行伝票等の研究所受付再開 9.14 夏季休業終了 | |
| 10月 | 10.3 又は 4 16:30～18:00 H29 第3回科研塾 (於 多摩キャンパス) 【内容】申請直前講座 ※本学スポーツフェスティバルの開催日に合わせて実施します。 | 10.25 H28 研究成果報告締切 (ジャーナルへの「短報」 「原著論文」投稿) | | |
| 11月 | | 11.17 H29 「中間報告書」提出締切 | | 11.10 H29 図書の予算執行伝票の研究所受付締切 11.17 H29 1月末までの「旅費」「謝金」の「計画書」「稟議書」提出締切 |
| 12月 | | | 12.14 H29 冬季休業前の予算執行伝票等の研究所受付締切(17時迄。なお、「設備品費」予算執行伝票の研究所受付は最終締切となります。) 12.23 冬季休業開始 | |

※ このカレンダーについてのお問い合わせ先は、☎03-5275-6047(千代田キャンパス内線5650)です。



大妻女子大学人間生活文化研究所

〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地
大妻女子大学千代田キャンパス図書館棟6階

Tel: 03-5275-6047 Fax: 03-3222-1928 E-mail: info@o-ihcs.com

HP : <http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/>

※ このニューズレターは、全国の大学・大学院、企業研究所、研究助成団体、官公庁などの関係機関に、およそ1,900部発送し、配付しています。



▶ ニューズレターの最新号およびバックナンバーはホームページよりご覧いただけます。